

岡山訪問記 (承前)

一 保 姆

六、農繁期托兒開設

岡山縣下の現在幼稚園数は七六園で其の設立の状態を聞けば、大正十年には僅かに二六園であつたのに五年後の大正十五年には六二園即ち五年間に三六園、平均七園強の割合で増設せられ、更に幼稚園令發布後一年半には十四園も増設され今又設立準備中のもの多數あるとの事である。かく幼稚園の普及されてゐるのみでなく、毎年、田植、蘭刈、刈入れ、の三期を、農繁期と稱し、縣、市、幼稚園からの指導應援の下に、郡の婦人會、女子青年會等の協力に依て、神社佛閣を臨時園舎とし

て、農繁托兒所を開設されてゐる。かような社会的施設に就ても、縣市の園長先生保姆各位の經驗あり定見あり而も熱心懇切な御指導される事は實に敬服の至りである。

七、各園の實況

岡山驛へ着いたのは午前五時十三分、まだ四方はうす暗い。トランクをさげて待合室に入る。掃除がとといて氣持がいい、朝の仕度をすつかり整へてしまつても短日の曉はなかく夜を脱しきらない。待合室のソファに暫く憩ふ。やがて七時になつた。親切な電車の車掌さんに道を教はつて東

田町の市立深抵幼稚園に着いたのはまだ七時半にならなかつた。當番の保姆の先生も一人はもう來ていらつしつて何かと應接をして下さつた。

(1)、市立深抵幼稚園

敷地六〇〇坪、園舎三〇七・三坪、保育室五、遊戯室一(八〇坪)、應接室、幼兒休養室、保姆室、使丁室、辨當保温器及器具室、

幼兒數 二一六 保姆 五

組數 五(大多數一年保育兒)

家庭との連絡

入園前(入園身體検査のすんだ後)及入園式後或は全體的に或は數人づゝ個人的、懇談的に、保護者の會をひらく。毎學期一回實地保育參觀其他保姆と母姉の打合せをする、唱歌遊嬉會、幼兒製作品展覽會、三月、五月節句、玩具會(家庭で最も好む玩具を持ち寄せ一日はそれで遊ばせ、一日はそれに就ての話をする)一等に母姉を招待す

る。毎日幼兒の持參する通信簿には出缺席のしるしの外通信欄があつて、各自の通信をする様になつてゐる、なほ一週一回の兒童相談所には幼兒の心身に就きての専門家が來園され、母姉保姆共によき指針を得るとの事である。

保育内容

ほどなく見えた(八時前であつた)園長先生と應接室でのお話をすませて廊下に出る。廊下は巾廣いたたきで保育室及遊嬉室の周圍をめぐつてゐる。遊嬉室は別棟で、園舎の中央にある、柱ない八角の室には一間程の大きな洋畫の額がある。掃除の行き届いた南向の庭には、池に龜が居り、夜は金網の外圍に木の戸を閉ぢるように出來た一間程の高さの大きな鳥籠に、數種の小鳥かとびまわつたり唄つたりしてゐる、高い滑臺の下の空間を利用してブランコが出來てゐる、たくさん竝んでゐる鉢には球根が、ほんのわづか芽を出してゐる。

上にやわらかいわらがのせてあるのを、そつとかきよせてのぞいてる幼児がある。木は大方若木ではあるが園舎をめぐる多種植えられてある。二百人の幼児にとつてはあまり広い方ではないが、東南に面したこの庭にはよく日光があたる。登園して各自通信簿にしるしの紙を貼るとそのまゝ室で遊ぶのは殆どなく皆庭に出る。けたまひしい時鈴に脅される事もなく、おさまりの會集に、お口を結ばせられる事もなく、お友達と玩具とそして遊びから遊びへと、うごいてゐる。郵便屋遊をする時のやうな小窓のある小さい衝立が庭の二箇所に出てゐる。これは幼児が思ひのまゝに器具の室から出して來たのである。切符の賣り手が三人位づゝ中に入つてゐる。庭にある小さい臺の上で五六人が「何處行」と云ふ切符を鉛筆で書いてゐる。箱積木で出來た汽車には、お客様(女兒多數)がいつばい乗てゐる、手頃の板を紐で首から吊り

種々な形の積木をお辨當やお菓子にして、停車場の物賣りになるもの高い滑り臺を下りては乗車し下りては乗車してゐる。何時といふ事なく一組は室には入て千代紙を作つて居られた。大きな遊嬉室の傍に奥行はあまり深くない間口一間程の積木の棚がある、そこには長短、厚薄様々の板、太細長短多様の丸太、穴のあいた箱、棒、真中に穴のある丸い木(車の輪に使はれる)長さ五寸程の徑二寸位の圓筒、種々な形をした木片等多種多様の積木がある。どれも角の圓くなる程使はれてゐる、幼児はこの棚のうちから遊ばふとする事に使用し得るもの工夫し得るものを自分で又友達同志相談しながら選擇して行く。その日には長さのそろつた圓筒を停車場構内のさくとして、積木の汽車の兩側に長くならべてあつた。穴のあいた箱(それは保姆の先生方がお家で手ごろの空箱があつた時、それに穴をあけ御自分でエナメルで着色され

たものであると一に棒を通し輪をはめて車を作りそれに他の木片を入れてひつばつて行く幼児もあつた。構内のさくにしてある圓筒はマツチ工場で出る廢物であると園長先生の話であつた。なほ此他玩具の研究に意を用ひて居られる當園では、或はサイダーの栓を二つあはせて中に小石を入れて色紙で封したものの、(これはままごとのお菓子やお人形のおもちや等に使はれる)小さい板に果物を積んだ様に塗たもの、これ等は皆園長先生はじめ保姆の先生方が常に心がけられて、板を集め御自身で採色描畫されたものであると、其他寫眞のフィルムをとつた後の心棒は厚紙製作の飛行機や車に、使用されてゐた。後にみせて下すつた奉祝ダンスの時使ふもしく色と水色の總のついた輪は、汽車の切符の截ちはじ、赤と青の細長い厚紙を利用して同じ色の紙テープで巻き、巾を細く切て總

としたものであつた。之等の數多い廢物利用は園長先生はじめ保姆の先生方が、日常あけくれのまらゆる機會に於て幼児の爲に意を用ひて居らるゝ貴い賜に外ならないのであつた。又布製のお人形(保姆の先生方御自作の)には澤山のお布團があつたので承ると、これは各兒が家から一枚づゝ持て來たのであると。お人形を座らせたり自分も敷いたりして、陽あたりのいゝ庭の御座の上で一團の女兒は、ままごと之餘念なかつた。何かお話をとお求めのままに、東京からの汽車の窓からのお話をすると、お畫すぎに「さつきの話の畫」と云つて男兒達が汽車やスキーを背負て山へ昇て行くのを畫かれた。豊富な玩具による幼児の豊富な遊びは、おきにあきてこの道からあの遊びへとうつる事はあまり見えず、一つの遊びを長く、發展的に幼児同志の相談又は一寸とした保姆の先生の助言によつて、續けられてゐた。お畫になると、園長

先生も一組擔任して居られるのでお机を拭いたりお盆を出したり、幼児と一處にお辨當の用意をされた、お辨當は、器具室に大きなオブン(天火)の様な保温器の中に入れて大層よく暖まつてゐた。序に暖房に就て述べれば、出来る丈多く窓を取つた保育室は殆ど内と外と大した温度の差がない程である、それに各保育室に四角い木の火鉢が一つだけ、然し陽あたりのよい、風の無い、長閑なこの園内では誰一人寒さうに火鉢によつて来るものはない皆元氣に外で遊んでゐる、停滞した温い室の空氣ほど氣持も悪く健康にも悪いものはない。幼い皮膚を新鮮な外氣で鍛へ得る木造建築の得點を今更のように感じた。保育室は十二坪幼児數から見ても少しせまい。が腰のひくいよりは出し窓があつて、書院のような處に繪本、小さい積木、廢物利用の玩具類が乗せてあり幼児の好むままに用ひられるようにしてある。室内の机は固定した位置にあり

椅子は一人一人回轉椅子で伸縮自由になつてゐる。「面白がつていたづらをしませんか」と伺つたら「はじめによく約束をして、自分の丈に合ふうちに、自分でまわし、出来たらあとは、おもちゃにしない事にきめてある」とのお話、私も終日この園に居てもどの室でもさういふ幼兒を一人も見なかつた。「先生!」と云つて一人の子が、私達が鬼ごつこをする時たんまをする手つきをした、先生は「はい」と云てうなづいてお見せになる。その子は急いであちらに行つた。あとで園長先生「よく子供はいろ／＼の事を私達に教へてくれます、今の符合も或時幼兒が、先生停車場に行くと、かういふ字(たんまの手つき、拇指と人さし指で輪を作ると三本の指がW形になる)が書いてありますよ、だから手でかうすればW.C.の事になる、とそれから、この符合を用ひるようになりまして」と話された。「汽車が出ましたね」幼兒は急いで

鼻をきれいにする。かうした小さい所にまで園長先生のち母様らしいち心づかひが届いてゐる。午後男兒は紙凧を作つた、日本紙に思ひ／＼の繪をかいて徑一分程の太いひごを骨にして裏から十文字と斜線にわたし、日本紙で所々はりつける、この凧が作られる前數日、凧あげの繪や畫用紙の凧のきりぬきや様々の凧が作られいよ／＼本當に上るのを作る事になつたのであると、の事である。

次の日、用事があつてこの園の玄關まで來たら庭の向の方で昨日作られた凧に尾がつき糸をつけて高くあげて走る幼兒の姿を見た、この日かへりに二組は表の玄關でない次の小さい門から歸つた、二百人もの幼兒が一口から出ると混雜するからとの事であつた、小さい門のそばには栗の若木がたくさんあつた、これは照宮様御誕生のち祝記念として植えたのであると、其他園舎の周圍に果樹花樹の若木がたくさん植えてあつた、園長先生の

園に對する永遠の御計畫を貴いと思つた。此園の幼稚園行事といふ印刷の中に觀察曆が出てゐる。

『先生、觀察々と近頃とり立てゝやかましく申されてゐますが、どういふ様になさいますか』と伺ふと「郵便局へても工場へても一處にまゐります、出來るだけ小人數づつ、先方でもよろこんで説明して下さいます、歸つて來てそれ／＼の遊びに製作にその印象が表れます、五月頃皆でし、み取りに出かけます、その時はち母様達も一緒に行きます、あつた／＼と掘り出した時の笑顔、机の上を買つた貝をいくつならべたつてこの氣持は出ません、どんな所にどうしてゐるか説明してもこの實感には及びません、室の中机の上の觀察は幼兒の觀察ではないでせう、とり立てては致しません、園外保育や日常生活の實感のうちによい觀察が出來るのではないでせうか」と大に同感であつた。

この園で感じた事は、先生方の日夜絶えざる御努力と、あの多數の幼児が一齊保育でなく、幼児お互の遊び、お互の交渉が自然に、落ちついてしかも元氣に子供らしくたえず、くり／＼と發展充實してゐる事である。今一つは幼児の個性觀察、でゲーム、遊戯製作あらゆる機會に、個性を觀察する事にとめて居られる、その遊嬉の振りを練習するのでなく、その遊嬉によつて幼児一人／＼の傾向が發露されるように工夫して居られる。願くばわづか一日でなく時を得てせめて一週間も參觀が出来たらとそれのみ残念であつた。二夜の汽車に疲れてこの日は直に宿で休養した。

・二日目の朝、縣立女子師範に行く幾百年前からそのまゝといふ講堂を御案内下さつた先生が見せて下さつた。紫式部の繪に見るような書院窓をめぐらしお宮のような深い屋根、天井もあまり高くないとみえて室内は少し暗い感じがする。然し古

木の板にかゝれた古い「講堂」の二字は熊澤蕃山先生はじめ多くの學徒を世に送つた貴い歴史に輝くように思はれた。傍にはいてふの古木の様なゴムの大木がそびえてゐる。南日本といふ感じもする。つく／＼と見あげ、見とれて朝の一時をすぎす。それから師範の校舎にそふて行くとまもなく花壇がいくつもある處、こゝから幼稚園と、こゝで御案内いただいた先生にお別れする。そばのプランコに三人ほど乗つてゐる、「おはやうございませ、幼稚園のお玄關につれて行つて下さいな」一寸はさまりの悪かつた、とく子さんすみ子さん達私を案内して下さる、芝の山空の川丸木をあつめて造つた橋、鶏小屋をまわつてお玄關に行く、廣い廊下のつさあたりの應接室で主任の先生にお目にかゝる、昨日探抵幼稚園で園長先生に叔母様のようななつかしさを感じた私は、今日またこの主任の先生に姉上のような親しみを持た。岡山と

いふ所は何といふいい所だらふ。品位あり落ちついた奈良に似て今少し活氣もある町の様子、築地の塀が長くつゞいてゐるところなどは、古き日本といふ感じがする。オートバイの爆音、自働車の警笛、工場の笛、右往左往の目まぐるしさ大都市の雑然さは影もない。

町に、人に、岡山は何といふちゆくゆかしさのあふれたところだらふ。かういふ所に住んだら私のような者も人間らしくなれるかしらなどと思ふ。扱附屬幼稚園の事を次に記します。(以下次號)

x
x
x
x
x

新刊

長尾 豊著

幼稚園ばなし第二集

さきの著「幼稚園ばなし」は童話ばかりでした。

この第二集は「朝のお話」「食後のお話」「お話の一、二、三」として訓話や自然界の話を集めてあります。

幼稚園時代の子供のちはなし材料としてのみならず、話の研究並びに親切な研究手引として好著(東京市麴町區下六番町四八 厚生閣書店發行、定價一

圓八拾錢)